

Subject : **Japanese**Production of Courseware
e- Content for Post Graduate CoursesPaper No. 02 : **日本語学 (Japanese Linguistics)**Module 15 : **モダリティ (1) (Modality (1))**

ज्ञान-विद्यान दिमुक्तये

**Development Team****Principal Investigator:****Prof. Anita Khanna**

Jawaharlal Nehru University, New Delhi

Paper Coordinator:**Prof. Prashant Pardeshi**

The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

Content Writer:**Prof. Emerita Yuriko Sunakawa**

University of Tsukuba

Content Reviewer:**Prof. Hideki Kishimoto**


Kobe University

Japanese

Japanese Linguistics

モダリティ (1) (Modality (1))

Description of Module	
Subject Name	Japanese
Paper Name	日本語学 (Japanese Linguistics)
Module Title	モダリティ (1) (Modality (1))
Module ID	JPN-P02-M15
Quadrant 1	E-Text

 **Pathshala**
पाठशाला
A Gateway to All Post Graduate Courses

Japanese

Japanese Linguistics

モダリティ (1) (Modality (1))

モダリティ (1)

もくてき もくてき がいかん ぶん はつわ ひょうげん
目的：このモジュールの目的は、モダリティについて概観し、文や発話で表現された
 じたい たい はな て しんてき たいど あらわ じたい せつめい
 事態に対する話し手の心的な態度を表す「事態めあてのモダリティ」について説明す
 ることである。

1. モダリティとは何か なに

「モダリティ (modality)」とは、文の**命題** (proposition) が表す内容について、話
 て とら ぶん き て つた あらわ
 し手がどのように捉え、その文を聞き手にどのように伝えようとしているかを表すも
 のである。

ぶん あらわ い み おお わ じょじゆつ そざい じたい あらわ ないよう
 文の表す意味は、大きく分けて、叙述の素材となる事態を表すものと、その内容
たい はな て かた き て でんたつ しかた あらわ わ ぶん
 に対する話し手のとらえ方や聞き手への伝達の仕方を表すものに分けられる。文はそ
はんえい じたい あらわ ぶぶん はつわ はな て しんてき たいど あらわ ぶぶん
 れを反映し、事態を表す部分と、発話時における話し手の心的な態度を表す部分から
な た
 成り立っている。

(1) たぶん 雨が降る だろうね。
あめ ふ

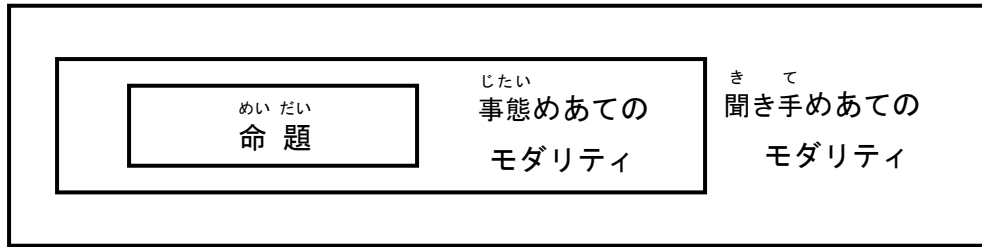
(2) もしかしたら 雨が降る かもしれないよ。
あめ ふ

うえ ぶん あめ ふ ぶぶん じたい あらわ めいだい ぜんご
 上の 2 つの文の「雨が降る」という部分が事態を表す命題で、その前後にある「たぶん...だろう」「もしかしたら...かもしれない」というのがこの命題に対する話し手のと
 めいだい たい はな て
 らえ方を表すモダリティである。さらに、文末にある「ね」や「よ」は、聞き手への
 かた あらわ ぶんまつ き て
 でんたつ あらわ
 伝達のしかたを表すモダリティである。

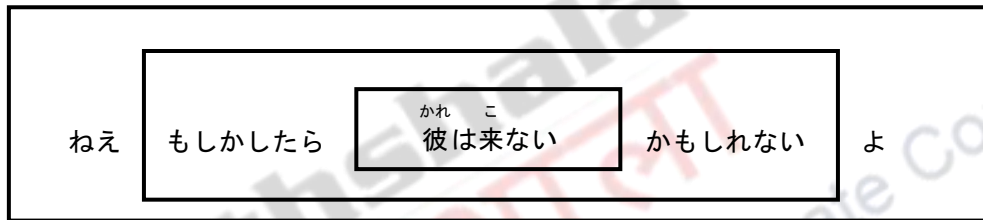
めいだい たい はな て かた あらわ じたい
 モダリティは、命題に対する話し手のとらえ方を表す「事態めあてのモダリティ」
 たい き て でんたつ かた あらわ き て
 と、それらに対する聞き手への伝達のしかたを表す「聞き手めあてのモダリティ」、さ
 せんこうぶんみやく かん せつめい しゅ たいべつ
 らに先行文脈とのかかわりかたに関する「説明のモダリティ」の 3 種に大別できる。

2. 文の意味の階層構造

じょうじゅつ ぶん めいだい な た にほんご めいだい
 上述のように文は命題とモダリティとから成り立つが、日本語では、命題とモダ
 ぶん こうぞう ひかくてきめいかく ほんえい とくちょう ずしきか
 リティが文の構造に比較的明確に反映されるという特徴がある。それを図式化したの
 ず ず み めいだい じたい つつ
 が図 1 である。この図に見られるように、命題は事態めあてのモダリティに包まれ、
 ぜんたい き て つつ かいそうてき こうぞう きじゅつ
 さらにその全体が聞き手めあてのモダリティに包まれるという階層的な構造として記述
 ず ぐたいてき ぶん あ ず せつめい
 することができる。図 1 を具体的な文に当てはめたのが、図 2 である。「説明のモダ
 じたい き て りょうほう
 ティ」は「事態めあてのモダリティ」と「聞き手めあてのモダリティ」の両方にまた
 ちゅうかんでき とくちょう も ず ひょうじ
 がる中間的な特徴を持つものなので、これらの図には表示されていない。



ぶん い み かいそうこうぞう
図 1 文の意味の階層構造



ぶん い み かいそうこうぞう ぐたいれい
図 2 文の意味の階層構造 (具体例)

以下においては、上記3種のモダリティのうち、「事態めあてのモダリティ」について述べる。「聞き手めあてのモダリティ」と「説明のモダリティ」については、「モダリティ (2)」を参照していただきたい。

3. 事態めあてのモダリティ

事態めあてのモダリティには、事態に対する話し手の評価的なとらえ方を表す

「評価のモダリティ」と、事態に対する話し手の認識的なとらえ方を表す「認識のモ

ダリティ」の2種がある。例えば、次の例を見てみよう。

(3) 彼は来るべきだ。

(4) 彼は来てはいけない。

(5) 彼は来る。

(6) 彼は来るだろう。

(3) は「べきだ」を伴い、彼が来る必要があること、(4) は「てはいけない」を

伴い、彼が来ることを許容しないことを表している。つまり、(3) と (4) は、彼が来る

ことに対する話し手の評価的なとらえ方を表している。

それに対し、(5) はゼロ形式（実体のない形式）を伴い、彼が来ることが確実である

こと、(6) は「だろう」を伴い、彼が来ることが確実ではないことを表している。つ

まり (5) と (6) は、^{かれ} ^く ^{じたい} ^{たい} ^{はな} ^て ^{にんしきてき} ^{かた} ^{あらわ} 彼が来るという事態に対する話し手の認識的なとらえ方を表している。^{ひょうか} ^{にんしき} ^{れい} (3) と (4) が評価のモダリティ、(5) と (6) が認識のモダリティの例である。

4. 評価のモダリティ

^{ひょうか} ^{はな} ^て ^{じたい} ^{でんたつ} ^{じたい} ^{たい} 評価のモダリティとは、話し手がなんらかの事態を伝達するときに、その事態に対する話し手の^{はな} ^て ^{ひょうかてき} ^{かた} ^{あらわ} 評価的なとらえ方を表すものである。「なくてはいけない」「てはだめだ」のような^{れんご} 連語や「べきだ」「ものだ」のような^{じょどうし} 助動詞によって表される。これら^い ^み ^{ぶんるい} ^{つぎ} を意味によって分類すると次のようになる。

1. ^{ひつよう} **必要**：べきだ、ものだ、なくてはいけない、といい
2. ^{きよか} ^{きよよう} **許可・許容**：てもいい、てもかまわない
3. ^{ふひつよう} **不必要**：なくてもいい、なくてもかまわない、ことはない
4. ^{ふきよか} ^{ひきよよう} **不許可・非許容**：てはいけない、てはだめだ

1 の「必要」は、その事態が^{ひつよう} ^{じたい} ^{だとう} ^{れい} ^{しんけん} ^{かんが} 妥当であること（例：もっと真剣に考えるべきだ／^{がくせい} ^{べんきよう} 学生は勉強するものだ），その事態が^{じたい} ^{ふかけつ} ^{れい} ^い 不可欠であること（例：行かなくてはいけない）

い) , その事態が望ましいものであること (例: 疲れたなら少し休むといい) などをあらわ表す。

2 の「許可・許容」は, その事態が許容できるものであること (例: 質がいいなら多少高くてもいい/最善を尽くせば失敗してもかまわない) を表す。聞き手の行為について言う場合は許可になる (例: 先に帰ってもいいよ)。

3 の「不必要」は, その事態が実現しないことを許容すること (例: あしたは来なくてもいい/期限に間に合わなくてもかまわない) , その事態が必要ないこと (例: 雨の日にわざわざ出かけることはない) を表す。

4 の「不許可・非許容」は, その事態の実現が許容できないものであること (例: 先生が間違えてはいけないなあ) を表す。聞き手の行為について言う場合は、禁止の意味になる (例: 作品に触ってはだめだよ)。

5. 認識のモダリティ

認識のモダリティとは, 事態に対する話し手の認識的なとらえ方を表すものである。助動詞や助動詞相当の連語や終助詞によって表される。それらを意味によって分類すると以下のようなになる。

1. 観察に基づく推定：ようだ， そうだ， みたいだ， らしい
2. 伝聞： そうだ， という， って
3. 疑い： か， かな， かしら， だろうか， のではないか
4. 断定： (ゼロ形式)
5. 推量： だろう
6. 蓋然性： かもしれない， はずだ， にちがいない， にきまっている

1の「観察に基づく推定」は，話し手の観察に基づく推定を表す（例：彼は来そうだ／風邪をひいたみたいだ）。

2の「伝聞」は，命題の情報源が話し手自身ではなく，他者からの伝聞に基づくものであることを表す（例：彼は来るそうだ／この地方では大雪の年は豊作だという）。

事態の情報源がどのようなものであるのかを表すこの種の文法的な性質は，「証拠性 (evidentiality)」と呼ばれている。日本語では証拠性が1や2に挙げた助動詞や助動詞相当の連語によって文末や文末近くで表される。

3の「疑い」を表す「かな」「かしら」などは，「彼は来るかな。」「彼は来るかしら。」のように下降調で発音すれば「疑い」を表す認識のモダリティだが，「彼は

くるかな?」 「彼は来るかしら?」 のように 上 昇 調 に発音したときは聞き手めあて

のモダリティに分類される。

4 の「断定」は、「彼は来る」「彼は来た」「彼が犯人だ」のように、話し手が事態

の内容を確かなものとして捉えていることを表す。「断定」以外のモダリティは、

「彼が来るようだ」「彼は来るだろう」のように何らかのモダリティ形式を伴うが、

「断定」を表すのはゼロ形式である。

5 の「推量」は、話し手の想像や思考による推量を表す (例: さぞ辛かっただろ

うね)。

6 の「蓋然性」は、話し手による次のような判断を表す。その可能性がある (例:

今日は雪が降るかもしれない)、それが当然である (例: 今頃は到着しているはず

だ)、間違いなくそう思う (例: 彼が犯人に違いない / このチームが優勝するに決ま

っている)。

6. モダリティに関わる副詞や副詞的な連語

以上に述べた形式は、文の述語の動詞や形容詞などに連なる形 で文末か文末近くで

用いられるが、モダリティにはこのようなもののほかに、文頭か文頭近くで用いられる

次のようなものもある。

(7) あいにく きょう あめ ふ今日は雨が降りそうですね。

(8) 幸い さいわ、たいした事故 じ こにならないですみました。

(9) 困ったこと こまに、急 きゅうな用事が入ってしまいました。

うえ かせんぶ の かん はな て かし こうお ひょうかてき たいど
 上の下線部は、これから述べることに關する話し手の価値や好悪などの評価的な態度
よ こくてき あらわ
 を予告的に表すものである。このような副詞や副詞的な連語も評価のモダリティの
いっしゅ
 一種である。

いっぽう なん
 一方、「何でも」「どうやら」などの副詞や「見たところ」「聞くとところによると」
ふくしてき れんご ぶんとう ぶんとうちか もち しょうこせい いみ ほきょう
 などの副詞的な連語は、文頭や文頭近くで用いられて証拠性の意味を補強する。

(10) 何でも なん かれ にゅういん彼は入院しているらしいよ。

(11) どうやら ぶ じ きこく無事に帰国できたようだ。

すいりょう がいぜんせい かん
 推量や蓋然性に関する副詞的な表現には「たぶん」「きっと」「もしかしたら」「お
 そらく」などがある。

(12) もしかしたら ^{ごご ゆき ふ} 午後は雪が降るかもしれないね。

(13) この調子では おそらく ^{ちようし よていどお すす} 予定通りに進まないでしょう。

^{ぶんとう ぶんとうちか つか ひようげん ぶんまつ けいしき あらわ にんしきてき}
文頭や文頭近くで使われるこれらの表現は、文末のモダリティ形式が表す認識的
^{い み こおう くわ の よこく はたら}
な意味と呼応して、それらを詳しくしたり、これから述べることを予告したりする働
^も
きを持つ。

^{ぶんとう けいしき ぶんまつ けいしき い み うえ いっち たど かけ く}
文頭の形式と文末の形式が意味の上で一致しないとき、例えば、「たぶん彼は来る」
^{すいりよう あらわ ふくし だんてい あらわ ぶんまつけいしき もち}
のように推量を表す副詞「たぶん」が断定を表す文末形式とともに用いられたとき
^{ふ か ぶん あらわ い み すいりよう てんか}
は、「たぶん」の付加によって文の表す意味は推量に転化する。

キーワード：

^{めいだい はな て しんてき たいど じたい き て}
モダリティ 命題 話し手の心的な態度 事態めあてのモダリティ 聞き手めあてのモ
^{せつめい ぶん い み かいそうこうぞう ひようか にんしき}
ダリティ 説明のモダリティ 文の意味の階層構造 評価のモダリティ 認識のモダリ
^{ひつよう きよか きよよう ふひつよう ふきよか ひきよよう かんさつ もと すいてい でんぶん うたが}
ティ 必要 許可・許容 不必要 不許可・非許容 観察に基づく推定 伝聞 疑い
^{だんてい すいりよう がいぜんせい しょうこせい}
断定 推量 蓋然性 証拠性
